



[Teeta]



「テエタ」

「テエタ」はアイヌ語で“昔”を意味します。北の大地で繰り広げられた昔の人々の文化や環境を、現在と未来の人々に伝えるのが私たちの仕事です。昔のこと、古いことを広く知ってほしいという願いを込めて「テエタ」をこの冊子のタイトルにしました。



旧石器の出土状況（遠軽町旧白滝3遺跡 旧石器時代）

○平成20年度発掘調査遺跡	2
○平成20年度の発掘調査	3
○人事異動	5
○資料紹介 恵庭市柏木川4遺跡出土の編み布	6
○地域の歴史	8

○平成20年度発掘調査遺跡

(平成20年5月1日現在)

委託者		原因工事	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)
国土交通省北海道開発局	札幌開発建設部	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事	キウス5	千歳市	500
			オリカ2		3,220
			アンカリト-7		4,050
			アンカリト-9		6,680
			祝梅川上田		9,910
			梅川1		780
			祝梅川小野		6,630
	網走開発建設部	旭川紋別自動車道白滝丸瀬布道路改良工事	旧白滝3	遠軽町	3,300
			白滝遺跡群		整理作業
	旭川開発建設部	天塩川サンルダム建設工事	サンル4線	下川町	900
	函館開発建設部	函館江差自動車道建設工事	館野2	北斗市	2,076
			館野6		6,438
			矢不來8		1,501
			矢不來9		1,164
			矢不來10		1,806
矢不來11			41		
室蘭開発建設部	一般国道36号登別拡幅工事	虎杖浜2	白老町	300	
		ボンアヨロ4		1,200	
国土交通省北海道開発局 計					64,046
東道路株式会社	函館工事事務所	北海道縦貫自動車道建設工事	石倉1	森町	16,489
北海道	石狩支庁	柏木川改修工事	西島松5ほか	恵庭市	整理作業 報告書
	胆振支庁	道道北進平取線改良工事	穂別D	むかわ町	報告書
	釧路町	町道床丹5号線道路改良工事	天寧1	釧路町	700
合計					81,235



遺跡位置図 (現地調査遺跡のみ表示)

○平成20年度の発掘調査

ちとせ
千歳市アンカリトー7遺跡

遺跡は、千歳市街から4kmほど東の祝梅川の東岸にあります。遺跡の地形は古砂丘に起因する斜面と平坦面からなり、緩斜面から平坦面にかけてアイヌ文化期の集落跡が広がっています。主な遺構は平地式住居跡11軒、建物跡2棟、竪穴状遺構1ヵ所、灰の集中5ヵ所、焼土8ヵ所、土坑墓1基などです。灰の集中では、中から当時の食べ物とみられるサケなどの魚骨や貝が出土しています。このほか周辺からは棒状の礫、コハク破片、刀飾りとみられる銅製品なども出土しています。写真は灰の上面にカワシンジュ貝が並べられたような状態で出土したものです。



灰とカワシンジュガイ

千歳市アンカリトー9遺跡

遺跡は、アンカリトー7遺跡と祝梅川上田遺跡の間に位置しています。調査区内の地形は、北東部分は古砂丘上の台地で最も高く、西側への斜面と平坦部及びそこからの緩斜面があり、西側もやや高くなります。

遺構は、土坑1基、焼土4ヵ所が確認されています。遺物は、縄文時代中期・晩期の土器や石鏃、磨製石斧、旧石器時代のエンドスクレイパー等が散在的に出土しています。

他に、太平洋戦争頃に構築されたと考えられる「掩体壕」が2ヵ所確認されています。規模等から、戦車等の車両を隠すための施設と推測されます。



掩体壕跡

ちとせ
千歳市祝梅川上田遺跡

遺跡は、JR千歳駅の東方約3.7kmに位置し、祝梅川右岸の低位段丘上に立地しています。北方約200mにはアンカリトー9遺跡があります。平成18年度にも発掘調査を行っており、今年度は2年度目の調査になります。

今年度の調査では、主に擦文文化期とアイヌ文化期の遺構・遺物が見つかっています。擦文文化期の遺構としては竪穴住居跡、アイヌ文化期の遺構として平地住居跡・建物跡、小柱穴群、焼土、灰集中、集石などがあります。

遺物は、擦文土器、棒状礫、金属製品などが出土しています。特にアイヌ文化期の遺構が多く、集落跡であったと考えられます。



住居(チセ)跡

ちとせ
千歳市祝梅川小野遺跡

遺跡は、千歳市街から東へ約3kmに位置し、千歳川支流の祝梅川右岸、標高7～13mの段丘～沖積地に立地します。

遺構は、縄文時代の屋外炉4基・礫群3ヵ所・土坑3基・落とし穴2基などがみつかりました。遺構の時期は、落とし穴を除いて縄文時代後期中葉～後葉の時期にまとまります。これらはいずれも縄文時代の河岸に沿った標高7.5～8mの低湿部分に作られています。そのほかアイヌ文化期～擦文文化期の土坑墓1基(伸展葬)・屋外炉6基・灰集中1基・立杭列1条が標高7.5～8mの低湿部分から検出されており、祝梅川小野遺跡に北接する梅川1遺跡へと連なるようです。なお、梅川1遺跡は今年度中に発掘調査が予定されています。



矢板で囲われた発掘区域



道跡

遠軽町旧白滝3遺跡

遺跡は、遠軽町白滝市街地の北東側約4km、湧別川左岸の河岸段丘上に立地しています。後期旧石器時代に属する多数の石器ブロックと遺構が確認されました。

石器ブロックは、6~8mほどの範囲に分布しています。主な石器には細石刃、細石刃核（広郷・札滑型）、石刃核、彫器、搔器、削器、尖頭器、有舌尖頭器、舟底形石器などがあります。特に広郷型細石刃核が多数出土しています。

遺構は焼土、炭化物の集中などがあります。炭化物の集中には、長径60cmほどの浅い楕円形の掘り込みに炭化物層が堆積し、その中に複数の被熱礫がまとまる例が確認されています。



竪穴住居跡とシャチ形土製品

北斗市館野6遺跡

遺跡は、館野2遺跡の南、海岸から約1.5km奥まった、標高50~58mの海岸段丘が沢に解析され小さな丘状になっているところに立地しています。調査範囲の周縁部分から、6月末現在で、縄文時代の土坑1基、Tピット1基、近世（江戸時代）の畑跡が検出されています。縄文時代の遺物は前期から後期の土器・石器が出土しています。今後、丘の中央部の調査で竪穴住居跡など集落の出現が見込まれています。

千歳市梅川4遺跡

遺跡は、千歳市祝梅に所在します。今年度は、B・C2地区の調査を行っています。

B地区のTa-a降下軽石層（1739年降下）直下のⅢ層では、アイヌ文化期の道跡群、焼土196カ所、カワシンジュガイ集中21カ所、獣骨集中3カ所、小柱穴626基を検出しました。鉄鍋、キセル雁首、刀子、釣針、耳飾り、火打ち金などの金属製品のほか、ガラス玉、土鈴、火打ち石、漆塗膜、カワシンジュガイの内皮、獣骨などが出土しています。そのほか、縄文時代の土器や石器、コハク玉、カンラン岩製の玉、擦文時代の土器、石器なども出土しています。C地区のⅢ層では焼土を2カ所、Ⅴ層では土坑1基と焼土を28カ所検出しました。遺物は、縄文時代中期末の北筒式土器や、石器類、板状岩偶などが出土しています。



石器ブロック

北斗市館野2遺跡

遺跡は、北斗市上磯駅から南南西に約3.5km、標高50mほどの海岸段丘縁辺部に立地します。大量の縄文中期前半~後半期の遺物とともに多くの竪穴住居跡や墓、フラスコ状ピット、土坑、屋外炉、焼土などがみつかっています。土器は円筒上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、大安在B式、煉瓦台式など、石器は石槍、石鏃、ドリル、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、北海道式石冠、台石など、土・石製品は土偶、「シャチ」をあらわしたと考えられる土製品、石棒などがみつかっています。



北斗市館野6遺跡

北斗市矢不來8遺跡、矢不來9遺跡、矢不來10遺跡

これらの3遺跡は、北斗市街地から西側へ約6km、海岸線からおよそ1kmに位置し、函館湾に注ぐ茂別川に向かう沢へ緩やかに下る、標高60～68mの海岸段丘上に立地します。

矢不來9遺跡で、近世以降の、地面に柱をたてて建物を構築した建物跡が1軒みつかりました。長軸が10m、短軸が9mの長方形をしており、中央に炬があります。柱穴は1640年に降灰した駒ヶ岳d火山灰層より新しく、柱穴の覆土中からキセル、陶磁器の破片が出土しています。このほか、縄文時代中期前半の竪穴住居跡2軒、後期前葉の焼土20カ所を検出しています。遺物は縄文時代中期前半から後期前葉の土器・石器が出土しています。



掘立柱建物跡



発掘調査の様子

白老町虎杖浜2遺跡

遺跡は、JR登別駅の北東約1km、標高45～50mの段丘上に位置する、貝塚を伴う縄文時代前期主体の集落遺跡です。本年度は、これまでの調査範囲からやや離れた、遺跡の北側縁辺部を5～6月に調査しました。焼土1カ所とその周辺から石器のフレイクチップの集中がみつき、土器片がややまとまって出土しました。土器は縄文時代早期後半～前期前半が多く、前期の土器の中には押型文が施されたものや道南の春日町式に類似するなどの特徴をもつものがあります。石器は、石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・石斧・すり石・石皿などが出土しており、数量が少ないもののていねいな加工が施されています。

森町石倉1遺跡

遺跡は、森町市街地から北西へ約9km、濁川火山の山麓斜面（標高30～50m）に立地し、現海岸線から700m程です。平成14～16年度に引き続き調査を行っています。

検出された遺構には水場遺構1カ所、竪穴住居跡3軒、土坑20基、焼土2カ所、集石2カ所、多数の柱穴状ピットなどがあり、これらは主に縄文時代後期前葉のものと考えられます。水場遺構は沢によって形成されたくぼ地から多数の礫石器と土器片が見つかったもので、これらの遺物はこの場所に廃棄された可能性があります。

遺物は、縄文時代中期から後期前葉にかけての土器と石器が多量に出土しています。ほかに赤色顔料が塗られた壺形ミニチュア土器があります。石器は扁平打製石器、台石・石皿等の礫石器が9割以上を占め、剥片石器ではメノウを素材としたスクレイパーやナイフ類も目につきます。



発掘調査区域全景

○人事異動

○ 常勤役員の選出（6月1日）

・坂本 均 理事長

○ 採用（4月1日付）

・石田八朗 総務部総務課参与

○ 転出（3月31日付）

・工藤研治（第2調査部第4調査課長）

北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課主査

・宗像公司（第1調査部第4調査課主任）

北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課主任

○ 退職（3月31日付）

・加藤英樹（総務部総務課参与）

・山田和史（第1調査部第2調査課嘱託）

○ 昇任（4月1日付）

・藤井 浩 第1調査部普及活用課主査
第1調査部普及活用課主任から

・中山昭大 第2調査部第1調査課主査
第2調査部第3調査課主任から

えにわ かしわきがわ
○資料紹介 恵庭市柏木川4遺跡出土の編み布

恵庭市柏木川4遺跡は、恵庭市を流れる柏木川の右岸段丘上から低湿部にかけて所在します。柏木川基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査で、北海道石狩支庁の委託を受けて、平成16年から3ヵ年におよぶ調査を行いました。平成18年度の調査で、旧河道底に堆積した泥炭層の中から、編み布が1.2×0.6mの範囲で部分的に重なって出土しました。放射性炭素年代測定と周辺から出土した土器型式により、この編み布は、縄文時代後期後葉（約3200年前）の遺物と考えられます。

この編み布は、国立民族学博物館吉本忍教授の所見によると、縷り編（もじりあみ）技法を基本とした模様編み布で、ヨコ糸をループ状に引き出ししたり、タテ糸の間隔を変えるなど数種類の模様編みが認められており、とても高度な技術で作られた編み布と言えます。縄文時代で、このような模様のある編み布が出土したのは初めてです。

同じ河道からは木製の舟形容器や槌状木製品など40点も出土しています。槌状木製品に関して、近くでは千歳市キウス5遺跡からも出土しており、この時期の特徴的な木製品と言えます。



柏木川4遺跡低湿部全景



編み布出土状況



編み布だけ取り上げるのは困難なため、分割して土ごと取り上げました。



編み布断片 タテ糸の間隔をあけた部分のヨコ糸を開き穴を作っています。片面（右）は通常の振り編みに見えますが、反対面（左）は、ヨコ糸をループ状に引き出した装飾性の高い模様編みがなされています。最大長6.4cm。



タテ糸間隔が密なものや広いものなど編み方に違いがあります。密な部分には編み方を変えて施された模様が見られます。



舟形容器出土状況



槌状木製品出土状況

○地域の歴史

北海道14支庁の再編問題が話題になっている。

北海道全体の行政区画は、明治以降に行われたもので、松浦武四郎の原案をもとに、地域的なまとまりを勘案しながら分割されたといわれている。それ以前には、アイヌの人々の「イオル」、江戸時代の「場所」、「知行地」などがあったと考えられるが、全体の地区割ではなく、狩猟・漁労などの日常活動範囲を中心にして、自然環境と強く結びついた区分であったと思われる。

今日、国際化が進む一方で、地域起こし、地域の見直し、地域の再生といった用語が用いられている。地域とは、「区切られた土地」「土地の区域」（『広辞苑』）の意味であり、議論の対象となるのは、時によって北海道全体、支庁、市町村単位など様々である。どの場合でも地域をどう把握するか、といった問題意識が明確にされなければならない。その基盤づくりのために、「地域史」の構築が必要なのではなかろうか。

最近、支庁再編を見越したような地域設定で『函館・渡島・檜山の歴史』という本が出版された。地域の歴史としてまとまっており、写真を多く使って見やすい組みとなっている。何より重要なのは、各地の教育委員会で社会教育、文化財、埋蔵文化財などの担当してきた方々、大学で研究を続けられてきた方々などが協力して執筆していることである。研究書としてより啓蒙書としての役割が大きくなっているが、その内容は遺跡の発掘、遺物の研究、文献の研究、地質の研究など長年にわたる調査の成果に裏付けられていることが伝わってくる。まさに、地域の人々が描いた地域の歴史である。ほかにも同様の地域史が企画されているという。刊行が楽しみである。

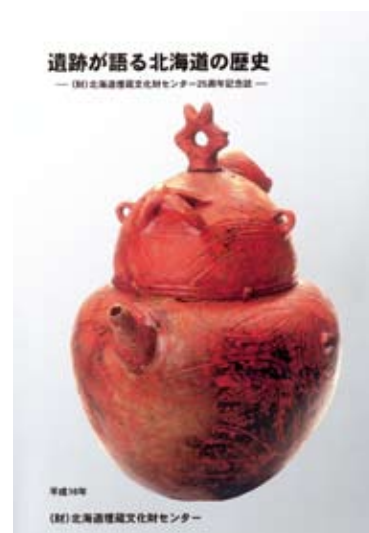
ところで、当センターでは、15周年、25周年にそれぞれ『遺跡が語る北海道の歴史』を刊行し、わずかな部数ではあるが、関係機関に配布した。道内各地で行った遺跡調査の成果を基に、考古資料から北海道の歴史をたどったものである。15周年と25周年ではそれなりの成果の蓄積がみられると自負している。発掘をして、その成果を記録していくことは我々の基本の仕事であるが、その成果を取りまとめて北海道という地域の歴史として紹介していくことが、地域の文化財保護の面からも、さらに重要になると考えている。

最後に、15周年記念誌について、国会図書館職員の方が書かれた書評の一節をあらためてかみしめておきたい。「国立国会図書館に納本される資料の中でも、これらの発掘調査報告書は毎年膨大な数にのぼる。しかしながら、（中略）それらをまとめた最新の成果に基づく研究書の出版は、（中略）必ずしも多いとはいえない。研究者である調査員も、当面の作業に追われ、各々の研究を進める時間的余裕が不足しているのが現状のようである。そういった意味では北海道という一つの地域について、遺跡の調査の成果を示しながら、一般にも判り易く解説した本書のような出版物は意義深いものであるといえる」（「本屋にない本」『国立国会図書館月報』1997）。

（第1調査部長 越田賢一郎）



15周年記念誌



25周年記念誌

◆交通案内◆

- ・JR大麻駅から、徒歩約20分
- ・新さっぽろバスターミナル発
 - ・JRバス（文教通西循環線）・夕鉄バス（文京台南町行）に乗車「くりの木公園前」下車、徒歩5分
 - ・JRバス・夕鉄バス（江別方面行き）に乗車「北翔大・札学院大前」下車、徒歩15分

